

スポーツに内在する問題について(5)

— キレルスポーツ選手たち —

岡 部 修 一

奈良産業大学地域公共学総合研究所

Essay of the inherent problem of sports (5)

– The enraged athlete –

Shuichi Okabe

Research Institute of Public Affairs, Nara Sangyo University

社会の中で問題化する「キレル」という概念による衝動的な行動が、スポーツ界でも多発している。勝利に執着し過ぎるなどの理由によって、常に冷静であるべきスポーツ選手が、短絡的あるいは粗暴な行為に走ってしまう。世の人々に理解され、スポーツを文化として未来に伝えゆくためにもスポーツ選手の成熟が求められる。

キーワード：スポーツ選手、キレル、成熟

1. はじめに

鍛え抜かれたプロスポーツ選手の人間離れしたパフォーマンスに、世の人々は興奮し魅了される。スポーツにおいて、人々を驚嘆と感動に導く高いレベルのパフォーマンスを発揮するために必要なことは何であろうか。武道の世界では昔から心技体の充実が肝要とされてきたが、現在では、体・技・心の順番で、そのいずれをもトレーニングによって向上させることが重要と言われている。

実際の試合で日頃の鍛錬の成果を十二分に発揮するには、気持ちの熱い昂ぶりとは冷静な判断力が必要であるが、「興奮」と「冷静」という相反する2つの要素を両立させることは極めて難しい。

アメリカの作家マーク・トウェインは「スポーツは武器を使うことだけを禁じられた戦争である」と表現したという。なるほどサッカーのワールドカップやオリンピック大会での熱狂的な応援をみれば、スポーツの国際試合は、まるで国同士の戦争のように思えてくる。日頃は国家意識の希薄な日本国民でさえ、このときばかりは一億総国民がナショナリズムの権化とみまがうほどの熱狂ぶりをみせる。もちろん本物の戦争が好きな者はいないが、スポーツに限らず、国と国で優劣を競う大会というものは、人々を興奮させ一時的に熱烈な愛国者にさせるものらしい。そんな国際試合、大会における選手たちの

モチベーションや勝利への執着は、著しく高まった状態にある。全身全霊、人生のすべてを賭けてでもこの試合に勝ちたい、そして勝つチャンスが十二分にある、このような究極の緊張状態、悲願達成への熱望、渴望状況ともなれば、平常心や心の平穏を保つことは困難になる。

しかしスポーツ選手には、精神が極限まで高ぶった興奮状態の中でも、冷静さと感情のコントロールが求められる。この相反する二面性の共存を図り、冷静な考えに基づく節度ある行動をとらなければならない。そういったコントロールが出来てこそ、世の人々の称賛を受け、尊敬される一流プロスポーツ選手といえよう。

しかし昨今、プロスポーツ選手の中でも、感情に任せた粗暴な行為、見境のない発言や行動が目立っている。社会にあっては近年、「キレる」という言葉が登場し、我慢や忍耐ができず衝動的な反応や行動を起こすことが目立っているが、スポーツの世界もまた例外ではないようだ。

教育面でも注目されるスポーツにおいて、一流スポーツ選手たちがみせる抑制のきかない振る舞いは、ファンに失望感を与え、次代を担うべき子どもたちへの悪影響も懸念される。感情に流されての短絡的な、昨今の言葉でいうところの「キレた」状況での行動は、自分自身さらにはスポーツの未来までも危うくすることになるのだ。

2. 職場放棄した女子プロゴルファー

2010年5月6日～9日茨城県の茨城ゴルフ倶楽部で開催されたLPGA（日本女子プロゴルフ協会）公式戦『ワールドレディスチャンピオンシップサロンパスカップ』で、前代未聞の事件が発生した。

大会初日の6日、有力選手の一人である三塚優子選手が、スロープレーによる2打罰の裁定を不服として、9ホール終了時点で「私的理由のため」と棄権してしまったのだ。

報道された事の仔細は以下の通りである。

三塚、馬場ゆかり、ニッキー・キャンベル組が7番ホール（パー4）ティーショットにさしかかった際、前組は8番ホール（パー3）グリーン付近まで達していた。通常これは前組とひとホール空いた状況で、当該組のプレー進行が遅いとみなされてもやむを得なかった。競技委員が3名の選手に急ぐよう指示したが、7番ホールアウト時点で前組との差はさらに離れた。このため8番ホールから三塚、馬場、キャンベル3選手に対するプレー時間の計測を開始、パー3で1オンした三塚選手は3メートル半のファーストパットに75秒、返しのパットに75秒をかけ、50センチのボギーパットにも20秒を要した。規定では1打にかけられる時間は目安30秒、リミットは60秒である。制限時間を2度もオーバーした三塚選手に対し、9番ホールティーショット前に競技委員から2打罰の宣告がなされた。

9番ホールのプレー終了後、クラブハウス前で三塚選手は、「メジャー大会はコースもグリーンも難しい。時間がかかるのだから考えてほしい」と泣きながら必死に競技委員2人に訴えたという。興奮気味の三塚選手に対し、競技委員はき然とした態度でスロープレーの理由を説明するが、自己の言い分を変えない三塚選手との話し合いはいつまでも平行線をたどる。約1時間の話し合いの末、「2打罰が納得いかないで私はやめます」憤然とした三塚選手は棄権届けを提出して会場を離れた。

LPGAのルールでは、前組との間隔が14分以上あいた場合、もしくはパー4でティーグラウンドに立った時点で前組がホールアウトしていた場合、その組が遅れを取り戻すまで競技委員による計測の対象になる。計測は自分の球がある位置に着き、プレーが始められるようになった時点がスタートで、本人やキャディーによる距離を歩測、パットのラインを読む時間も含まれる。

その上でペナルティーの対象となるのは次の3つである。

- (1) 遅れている組の選手が1ストロークに60秒以上の時間をかけた場合
- (2) 1ホールの平均所要秒数より11秒以上かかった場合
- (3) 1人の競技者が著しく遅い時は基準に該当しなくとも罰則を適用。

今回の三塚選手は(1)に該当した。なお、罰則は初回、2回目が2打罰、3回目以降は失格となる。スロープレーの多発に伴い、今シーズンより罰則がこれまでの1打罰から2打罰に改訂されたばかりで、今年度にスロープレーのペナルティーを受けたのは、三塚選手が初めてであった。昨シーズンの罰則適用は9回あり、4月のライフカード・レディースでは、現在世界トップレベルに君臨する申ジエ(Ji-Yai Shin)選手もペナルティーを受けている。

日本女子プロゴルフ協会(以下、LPGA)は、2オンの狙えるパー5などである程度時間を要するのはやむを得ないが、日本の若手選手や海外の選手の中にはパッティングラインの読み、スイングやパッティングのルーティンに時間をかけ過ぎる傾向が目立つと指摘している。予選ラウンドでは組数が多いため、1打ごとの時間のかけ過ぎが積み重なると、後の組が待たされ全体の流れが悪くなる。プレーを円滑に進めることは、アマチュアゴルフでも最重要でゴルフの基本とされている。

三塚選手の棄権に関してLPGAの小林浩美理事は「三塚はゴルフ界の財産なのに個人的な主張だけで試合を放棄するのは残念」と苦言を呈した上で「(協会発足後)43年間を振り返っても記憶にない。処分の可能性はゼロではない。厳重処分もあり得る」との见解を示した。結局、三塚選手側が自主的に申し出た「2カ月間(国内8試合)の出場辞退とプロ活動の自粛。海外3試合の出場辞退」を協会が受け入れ、処分としては罰金200万円と2年間の新人セミナー受講に決まった。

三塚選手の棄権について問題点は2つある。裁定が納得できないとの自己主張を曲げず聞く耳をもたなかったこと、そして私的感情で試合棄権するというファンやスポンサー無視の暴挙に出たことである。

スポーツはルール遵守を根幹として成り立っている。審判や採点者のジャッジについて、むろん不正や八百長の場合は別として、その裁定に従うというのが大原則である。確かにいろいろなスポーツで審判の誤審が問題になっているのは事実で、出来る限り正確なジャッジを下すために近年ビデオ判定を導入する競技も増えてきたし、審判のレベルアップも必要不可欠であろう。しかし機械に頼らず人間にジャッジに基づいて試合を行うのであれば、それに従うのがすべてのスポーツの大前提であり、根本原則であるはずだ。

ゴルフには審判が存在しない。何らかの事態が発生した際には、同伴競技者のマーカーに申告、確認を受けた上で競技者自身がルールに基づく処置を行うことが原則であり、判断に迷うときは競技委員を呼んでアドバイスを受ける。したがってルールに基づく競技委員の裁定は絶対なのである。三塚選手が競技規則の「プレーのペースに関する基準及び罰則」に違反したのは事実であり、「難しいコースで時間がかかるのだから考えてほしい」などと計測に文句をつけること自体が筋違いである。

また「たまたま私に（罰が）来るのは納得できない」とも訴えたそうだが、LPGAの説明によれば、同組の馬場、キャンベル両選手のプレー時間も計測し、時間をオーバーしたのは三塚選手だけであること、またスロープレーを指摘されると通常、選手のプレーは速くなるものであるが、競技委員に警告されながら三塚選手にプレーを急ごうとするような印象は受けなかったとのことである。もちろんスロープレーを指摘されるのは選手にとって心外であり不愉快なことに違いない。しかし規則に基準が明記されている以上、それに従うことは選手の規範意識として絶対必要である。まして「納得できない」という個人的感情に固執するのは、自己中心的思考であり駄々をこねているに他ならない。

また私的感情で試合を棄権するということは、プロゴルファーとして職場放棄であり、ファンやスポンサーに対する裏切り行為である。男子プロゴルフ界の杉原輝雄は今年71歳、53年間にわたってプロとして活躍し、日本男子ゴルフツアーの浮き沈みを知り尽くした重鎮的存在であるが、誰よりもファンやスポンサー、関係者に対して感謝の気持ちを忘れない。「現在の男子ツアーは石川遼君のおかげで凄く盛り上がっている。やっているプロも居るけど、他のプロも感謝の気持ちがまだまだ薄い。賞金が減っても試合をやっていたらいい。そういう事に対して必死の気持ちでやらなくてはだめ」と常々、日本の男子ゴルフ界に苦言を呈している。

1990年代前半、バブル経済崩壊後にもかかわらず日本の男子ツアーは、年間約40試合の大会が生まれ、賞金総額も約40億円に及んでいた。統轄団体であった日本プロゴルフ協会は、トーナメントを開催さえすればメディアが取り上げ、世間に注目されて次々とスポンサー企業が名乗りをあげるものと勘違いしていた。また選手側も自分たちは人気があると錯覚してその現状にあぐらをかき、スポンサーが最重要視するプロアマ戦を平気で棄権したり、ファンの声援やサインを求める声を無視するなど、傲岸不遜な行為が目立ったという。驕る平家は久しからずの例え通り、やがてスポンサーやファンに愛想を尽かされ、そっぽを向かれた男子ツアーは、低調な経済状況の影響もあってスポンサー企業の撤退が相次いだ。最盛期に40数試合を誇った男子ツアーも今年度は25試合である。現状は石川遼選手というスーパースターの登場によって、以前より注目と関心も高まってきたが、それでもツアー試合数の劇的増加にはつながっていない。

女子ツアーでは2000年代半ば、宮里藍選手や横峯さくら選手ら若きスーパースターが登場した。このときLPGAは男子ツアーの衰退要因を反面教師として、スポンサー対応やファンサービスについての徹底的な見直しと選手教育を図った。前出の小林理事は「試合を提供して下さるスポンサーに、きちっとした形で還元することです。今も努力していることですが、やはりプロアマ大会で大切なお客様に、「楽しかった、来て良かった」と思ってもらえるような対応をすることがいつでも大事です。また大会前夜や終了後のレセプションを欠席したり、マスコミに対してぶっきらぼうな態度を取ったりしないよう、徹底的に指導してきました。さらに会場に足を運んで下さる根っからのゴルフファン、ギャラリーに対する更なるファンサービス。選手がサインをするのは当然ですが、他にも、子供向けのゴルフ教室やイベント、チャリティがあつたりもします。おかげで、関係者の間では女子プロは男子プロよりもずっとホスピタリティが優れていると言われてます。¹⁾」と語っている。

このようなコンセプトに基づいて女子ツアー人気をますます盛り上げようと協会、選手、関係者が努力を続ける中で、三塚選手の棄権だった。

『ワールドレディスチャンピオンシップサロンパスカップ』は通常のツアー大会と違い、年間4試合しかないLPGA主催の公式戦であり、しかも開催された茨城県は三塚選手の地元でもあった。

三塚選手には、地元開催の公式戦で勝ちたいという強い思いがあったであろうし、だからこそスコアにこだわる気持ちから、罰打に納得できないと強硬に抗議したのも理解できないでもない。それでも三塚選手を応援するファンやサポートするスポンサー、運営に携わる大会関係者にとって、試合を投げ出すという行為は容認できるものではなかろう。全米女子プロゴルフ協会メンバーの宮里藍選手は、「全米女子ツアーで5年間戦っているが今回のような事例は聞いたことがない。アメリカの選手なら、むしろ終わってから抗議するかな。怒っても自分のプレーを投げることはないと思う。」と語った。

世界のゴルフツアーの中で、女子ツアーが男子ツアーより人気があるのは日本と韓国ぐらいで、米・欧州ツアーでは男子が主流だ。米女子ツアーではメジャー大会でも観客がまばらなことがある。

ティグラウンドからグリーンまでびっしりと観客が詰めかけ「ナイスショット」と歓声を浴びるのは、プロ冥利に尽きるはずだ。そのような環境でプレーできることに誇りと感じ感謝の念をもって、三塚選手はプレーを続けるべきだったのである。長身でボールの飛距離も出せる大型ゴルファーで、すでにツアー3勝の実績をもつ三塚優子選手には、日本女子ゴルフを担う選手としてLPGA内でも期待の声は大きい。しかし彼女が大輪の花を咲かせるためには、感情をコントロールし冷静な判断ができる力を身につける必要があろう。どのスポーツでもメンタル面の影響が大きいと言われるが、とりわけゴルフはその傾向が著しい。かつてスポンサーやファンを思いやらずに衰退した男子ツアーの轍を踏まないためにも、自己中心的、独善的な行為は厳に慎むべきである。

3. 味方同士で荒れる大リーグ

野球においても、感情を爆発させ衝動的な行動の事例があとをたたない。アメリカ大リーグ(MLB)では、投手が打者に死球(デッドボール)を与えるなどに端を発し、両チームの選手が入り乱れる乱闘劇が頻発している。メジャーリーグの風物詩のようなものと評する向きもあるが、決して褒められるべきものではない。そして今シーズンは味方同士で選手が感情を爆発させ、あわや殴り合いになる“事件”が相次いでいる。

6月25日シカゴ・カブスのシカゴ・ホワイトソックス戦、先発カルロス・ザンブラーノ投手は1回裏4安打4失点でダッグアウトに戻ると、デレク・リー一塁手に怒声を浴びせた。先頭打者の右翼線二塁打を「お前がダイブしていれば取れた。あれでリズムが狂った」と激しく罵ったあと、ダッグアウト内に設置されていたウォータークーラーを引き倒して破壊し、そのままクラブハウスに引きあげてしまった。彼はすぐカッとなる性格で、2007年にはパスボールしたマイケル・バレット捕手と殴り合いのケンカを演じたこともある。

ついでタンパベイ・レイズ。6月27日のアリゾナ・ダイヤモンドバックス戦5回表、左中間の打球をB. J. アップトン中堅手はまるでジョギングのような緩慢な走り方で追い、三塁打にした。チェンジ後にダッグアウトでエバン・ロンゴリア三塁手に何か言われたアップトン選手が激怒、テレビカメラの

前であわや殴り合いになりかけたが、チームメイトが二人を引き離し事なきを得た。このひと月チームは12勝19敗と大きく負け越し、ロンゴリア選手は「皆苦しんでいる時だからこそ、全員が一丸とならないといけない。ああいうプレーはチームの士気を削ぐ」と意見したということだが、アップトン選手は素直に聞く耳を持てなかったわけである。ちなみにレイズのジョー・マドン監督は「アップトンが全力疾走しなかったのは明らか。チームメイト全員が感じていることをロンゴリアが代弁したのはいいことだ」と評した。

イチロー（鈴木一郎）外野手が所属するシアトル・マリナーズでも、7月23日ボストン・レッドソックス戦の5回裏、ベンチ内で選手同士がつかみ合う騒動が勃発した。5回表の守備で、先頭打者の左翼線安打に対する中継プレーでそれたボールをチョーン・フィギンズ二塁手が追おうともせず傍観する緩慢プレーをした。ドン・ワカマツ監督は「あれはフィギンズが責任を持って捕るべきだ」とチェンジ後に交代を通告して代打を送った。これに怒ったフィギンズ選手がワカマツ監督に暴言を吐き、ラッセル・ブラニャン選手が「監督に何という口をきくんだ」と激怒して詰め寄った。すると今度は2人を制止に入ったホセ・ロペス選手がなぜかブラニャン選手とつかみ合いを始め、大混乱に陥った。

八つ当たりであったり、緩慢もしくは怠慢プレーを指摘されての逆上など、いずれも些細なことが原因である。試合中に大の男が本気でつかみ合いをするほどのこととは思えない。しかしどの例も成績が芳しくない状況のチームで発生しており、不甲斐なく、張り合いもなく、達成感や満足感も得られずという日常に、選手たちそれぞれのフラストレーションが溜まり、イライラが募っていたに違いない。このようなストレス下で、モチベーションを維持し感情をコントロールすることは確かに困難だが、プロスポーツ選手である以上、いかなる状況でもまず成すべきプレーに全力を尽くさねばならないし、無気力、利己的、短絡的な行動でチームの和を乱すことは決して容認されない。苦境にあってこそ真価が問われるのは万国共通のはずである。

それにしてもアメリカのスポーツは、MLBはじめNBA（北米プロバスケットボールリーグ）NFL（北米アイスホッケーリーグ）も含めて乱闘や粗暴な行為が目立つのだが、大多数を占めるアメリカ人のファンはそれもショー的要素として受け入れているのだろうか。もちろんスポーツをエンターテイメントとして捉えるか、教育的あるいは武道での精神修養的なものとして捉えるかによっても大きく違ってくるが、やはり激情に端を発する暴力的なものは見苦しいし容認し難い。

4. 阪神タイガース 桧山進次郎

NPB（日本野球機構）阪神タイガースに桧山進次郎という選手がいる。1992年ドラフト4位で阪神タイガースに入団、2000年代前半にはチームの主力選手として活躍し、同時期には球団選手会長の重責も担った。40歳を越えた近年は代打での起用が中心となっているが、19年目になる今年も、チーム生え抜きのベテラン選手としてゆるぎなき存在感を示している。

その桧山選手がシーズンの開幕日にプライドにかかわる衝撃的な出来事に見舞われた。

2010年3月26日横浜ベイスターズとの開幕戦（京セラドーム）、2点リードの6回裏1死1、3塁で

「代打・桧山」が告げられた。

今季初打席。桧山は緊張感をMAXまで高めていた。しかし。相手投手が右の加賀繁から左の高宮和也にスイッチされると、阪神ベンチは代打の代打に矢野耀大を起用した。「どの選手にとっても、開幕戦は『さあ、今年一年頑張るぞ』という大事な試合。ピッチャーなら初めてのマウンド、バッターなら初めての打席は、何年たっても緊張する。僕はそれを奪われた。スタートでいきなりの拍子抜けですよ」

追加点の欲しい場面ではあった。桧山が左の代打の切り札なら、城島健司の加入でベンチスタートとなった矢野は、右の代打の切り札だっただろう。それでも一度打席に向かったベテランを、ベンチへと引き返させるほどのシチュエーションだったのか。桧山の腹の中は煮えくり返っていたに違いない。それでも「若い選手も見ているから」と悔しさを押し殺した。

「クソッとは思いましたよ。どんなことがあっても、絶対に忘れへんと。それと同時に、覚悟しました。相当、厳しい一年になるなと。今年のチームは、それだけ勝ちにこだわっていくんだと感じたからです。」

首脳陣批判をするつもりなど毛頭ない。あの状況を悔しいと思わなければ、選手として終わっている。その悔しさを「チームの勝利へのこだわり」として消化する強さを持っていたからこそ、桧山は翌日の試合で真正正銘の2010年初打席に立ち、Hのランプをとすことができたのだ。(後略)

ちなみに桧山選手はその後も代打としての活躍を続け、6月4日甲子園でのセ・パ交流戦のオリックス戦で代打通算109安打を記録した。これまでは同じ背番号24を付けていた球団大先輩の遠井吾郎の代打通算108安打が記録であったが、33年ぶりに新記録をマーク、球団史上トップに立った²⁾。

プロ野球選手ともなればその自尊心の強さたるや、人並み外れていると想像するに難くない。しかも長年チームを支えてきた存在感あるベテラン選手、それが相手投手が右から左に代わったというだけで、代打の代打を送られたのだ。まるで実績の乏しい選手の如き扱いにも感じるであろうし、信頼感が高ければ、本当に信用されていれば、相手投手の左右に関係なく、そのまま打席に送られるはずだと思うであろう。しかもプロ野球選手にとって、極めて重要な開幕ゲームでの無情な仕打ちだった。

普通なら怒りの表情や態度を露骨に示し、感情的になっての首脳陣批判の言葉が出てもおかしくない。それだけの実績も自負もった選手なのである。しかし桧山選手はそうしなかった。俗にいうグッとこらえたという状況だ。

「若い選手も見ているから」と「今年のチームは、それだけ勝ちにこだわっていくんだと感じた」その悔しさを「チームの勝利へのこだわり」として消化する強さを持っていたのである。

激情に流され暴言や粗暴な行為に及ぶ選手がいる一方、桧山のように激怒してもおかしくない状況でも自分の無節操な振舞いが周囲へ悪影響を与えると瞬時に判断、我慢と忍耐のできる選手がいる。これこそがスポーツ選手が到達すべき人格的資質であり、人間性の高みであろう。

ただ桧山進次郎選手はプロ生活19年目の超ベテラン選手である。その長いキャリアの中で若手、働き盛りの中心そしてベテランと変化する立場を過ごし、華やかなスターの時代もレギュラーを外れた不遇の時代も経験してきた。その経験値こそが桧山選手の心の成熟につながったともいえる。スポーツ選手の成熟、すなわちスポーツの本質や意義を見出すには長い歳月を必要とする。スポーツが単なる「ルールのあるケンカ」や腕比べ力自慢ではなく、スポーツ選手本人の人格の陶冶と、世の人々に感動と共感、

元氣を与える存在であると理解しなければならない。

5. まとめ

スポーツ選手は緊張、興奮など精神が極限まで高ぶった状態で、冷静さと感情のコントロールが必要である。しかし昨今、プロスポーツ選手の衝動的で粗暴、節度のない行為が顕在化している。

この20年ほどの間にスポーツの価値基準には変化が生じた。審判の目の届かないところでのファールを上手いと誉めたり、相手を負傷させる危険性がある荒っぽいプレーを闘争心があふれていると評するなど、勝たなくては意味がないとの勝利至上主義がまかり通るようになった。それに伴いスポーツ選手の道徳心・倫理観、いわゆる「スポーツマンシップ」の概念が著しく希薄化していきているように思えてならない。またオリンピックで金メダルを取った柔道選手や世間の注目を集めるプロボクシング選手が「スポーツはルールのあるケンカ」と広言するなど、あまりにフェアプレーの精神がないがしろにされてはいないだろうか。

スポーツは相手がいなければ成り立たないし、審判や採点、裁定者がいなければ試合をすることができない。プロスポーツの場合はスポンサーやファンがいなければ、存続すること自体が不可能である。さらにチームメイトがいて、スタッフのサポートがあり、一人の選手の競技生活には実に多くの人々が関わっている。

こうした多くの人々の支えや応援を受けることによって、スポーツ選手は目標に向けて進むことが可能であり、夢の実現も果たすことができるのである。したがってスポーツ選手は自らを取り巻く人々に対する感謝と敬意の思いを決して忘れてはならない。

このことに思いを馳せず、傲岸不遜で独善的になったとき、スポーツは単なる自己満足の果たし合いでしかなくなる。有名になってお金が儲かるから勝ちたいというだけの単純で貧しい発想では、人々の支持や畏敬の念、関心を得ることはできないであろう。一流めざして努力と研鑽を重ねて這い上がる過程での「頑張って裕福になりたい」というハングリー精神は理解されても、成功を手に入れ功なり名を遂げてからも尚、極端に金銭に執着するようでは、人々に共感され尊敬されることはない。日本でも一流のプロスポーツ選手が寄付やボランティアなどの社会活動、後進育成への助成などの社会貢献をすることが多くなってきたことは望ましいことである。

そもそもスポーツには、反教育的ともいえる側面が存在する。とくに対戦型スポーツでは作戦として、表現は不適切かもしれないが、「騙し」「嫌がらせ」「弱いものイジメ」などが堂々で行われている。

相手の意表をつくプレー、例えばバスケットやラグビーなどのフェイントモーション、野球のピックオフプレー、サッカーのオフサイドトラップ、バレーボールの時間差攻撃などは、すべて相手を騙そうとするものである。また制限時間いっぱいプレー開始を遅らせたり、自軍でボールキープをするなどは相手を焦らす嫌がらせであろうし、何より相手の防御の甘い部分、弱いゾーンや選手に対して徹底的に攻め込むというのは、一種の弱いものイジメである。

むしろスポーツという互いが練習で鍛え合って対峙する限定された条件でのことであり、一般社会での陰湿で犯罪的な行為とはまったく別ものだ。それでも勝ち負けという厳然たる結果を求め、ルールに

基づいて相手を打ち負かし、倒すことを本質とする弱肉強食の世界である。勝つことだけを究極目標とするならば、スポーツの残酷で不遜な部分ばかりが強調されかねない。むろん試合中に情や思いやりは不要であるが、相手に対する敬意だけは、常に心に留めおくべきである。

とくに試合後、勝敗が決着すれば、勝者は敗者に敬意と感謝の気持ちをもつことが不可欠である。勝者の傲慢さが強調されるようでは、それはまさしく「ルールのあるケンカ」に過ぎない。

極限の興奮下でも、冷静さを保ち、感情のコントロールができるような人格形成を図ることは、成熟したスポーツ選手育成への第一義的なことであり、これこそがスポーツのめざすべき方向である。将来にスポーツを文化として残していくためにも、スポーツを通しての人間教育と人格陶冶が成されなければならない。

引用文献

- 1) 社団法人日本ゴルフトーナメント振興協会広報誌トーナメントナウ2010年5月号 (No.210).
- 2) 週刊ベースボール2010年8月23日号 野球浪漫2010 熱き男の白球ストーリー Vol.21. 35-39.

参考文献

- 井上 俊・亀山佳明 (1999) スポーツ文化を学ぶために. 世界思想社.
- 岡部修一 (2005) スポーツに内在する問題について 奈良文化女子短期大学紀要36: 81-87.
- 岡部修一 (2006) スポーツに内在する問題について (2) 奈良文化女子短期大学紀要37: 75-82.
- 岡部修一 (2007) スポーツに内在する問題について (3) 奈良文化女子短期大学紀要38: 117-124.
- 岡部修一 (2009) スポーツに内在する問題について (4) 奈良文化女子短期大学紀要40: 41-48.
- 近藤良享 (2004) スポーツ倫理の探求. 大修館書店.
- 玉木正之 (1999) スポーツとは何か. 講談社.
- 中山和義 (2008) スポーツから気づく大切なこと. 実業之日本社.
- 西山哲郎 (2006) 近代スポーツ文化とは何か. 世界思想社.

